

第19回熊野灘の漁業を考える
関東東海海域での海況変動と主要水産資源の動向 II
—各海域での海況変動と主要魚の漁場形成—

速報

伊藤宜毅(考える会), 岩田静夫(相模水振興), 遠藤晃平(三重農水),
栗藤和治(考える会), 関根義彦(三重大院生資), 山川 卓(東大院農)

標記の地域研究集会は, 2010年2月20日に三重県尾鷲市の中央公民館講堂において, 水産海洋学会, 三重県水産研究所, 熊野灘漁業を考える会の共催により行われた。研究者, 漁業者, 行政担当者, 一般参加者を含め計70名の参加のもと, 基調講演および6題の発表と総合討論が行われた。

中田 薫・水産海洋学会事業委員長による桜井泰憲会長のメッセージ紹介と挨拶, 伊藤宜毅・熊野灘漁業を考える会代表の挨拶に引き続き, コンピーナーを代表して伊藤が趣旨説明を行い, 研究発表を開始した。

基調講演において岩田(相模湾水産振興)は, 関東東海海域における漁海況予報のこれまでの歩みと主要魚の漁場形成研究をレビューした。1964年に開始された「沿岸沖合漁業海況予報事業」から現在の1都5県による「関東・東海海況速報」に至るまで, 現場での利用価値のより高い情報をめざした改善が重ねられてきたことを順に説明した。今後の課題として, 「これまで作成・提供された海況速報に, 魚種別・発育段階別に漁場位置と漁獲量を重ね, 漁場形成と海況変化とのかわりについて長年蓄積された漁業者の知識を収集しながら検討する必要がある」とした。

セッションの「各海域での浮魚資源の変動と漁場形成」において, 長谷川(静岡水技研)は駿河湾・遠州灘におけるシラス類の漁場形成について報告した。近年の漁場形成状況を関東・東海海況速報に重ね合わせて検討した結果, 沿岸への暖水波及とシラス漁場形成が密接に関連していることが示された。一方, 伊豆諸島海域のサバ類の漁獲変動と漁場形成について講演予定の岡部(神奈川水技セ)が急遽参加できなくなったため, 岩田(相模湾水産振興)が代理報告を行うとともに, 水口(考える会)が岡部の要旨を代読した。マサバの漁場形成に関するこれまでの研究による知見を振り返った後, 近年のマサバ漁場形成状況を関東・東海海況速報による情報と関連させて考察した。

セッションの「広域回遊資源の変動と漁場形成」では, 久野(三重水研)がブリ類の漁獲変動と漁場形成について,

数十年, 数年, 数日の各時間スケールでの特徴を整理した。宇田(1960)の言明した「暖流が沖合から時々迫ってきて, その沿岸水との間に形成される前線(潮境)が移動垣網のように沖からよせて, 定置網へ追い込んでくれるような海況」が, 現在でもブリの入網に重要な条件であると再確認した。標識放流調査によるブリの成長段階別の移動回遊に関する知見を踏まえ, 若齢魚の獲り控えによる資源管理が地域にとっても重要であると強調した。次に御所・竹内(和歌山水試)はカツオの漁獲変動と漁場形成を報告し, 春季大不漁年には秋季の漁獲割合が高く小型魚主体であること, その翌春にはやや大きめのカツオの漁獲があることなどを示した。北赤道海流域の3-5月の水温・塩分偏差と翌年春季の紀伊半島沖のカツオ漁獲量に見られていた相関関係が, 近年の連続不漁年('05-'09)では崩れてきていることを報告し, 国際的な資源管理の必要性に言及した。

セッションの「近年の黒潮の動向と漁海況情報」では, 関根(三重大院生資)が黒潮流路変化と今後の動向について, 1976年以前, 1977-1988年, 1989年以降に分けて整理し, 近年では黒潮の流量が増大したため, 相対的に流速の小さい年にのみ大蛇行流路となり, 以前の傾向とは逆になったことを説明した。次に, 津久井(静岡水技研)は関東・東海海況速報に関連した漁海況情報について漁業者へアンケート調査した結果を報告した。昨今の燃油高騰によって漁場探索の効率化が求められており, できるだけ漁業者のニーズに合った情報提供を工夫していく必要がある。

総合討論では, 関東・東海海域の海況変動と漁場形成, 情報提供の課題について関係漁業者の意見・要望を聴取するとともに, 課題対処への効率的推進に向けた体制, 心構えなどの討議がなされた。海況速報に空間的な位置情報を有する漁況情報を準リアルタイムで重ね合わせて表示・提供していくことで現場情報の共有化, 蓄積を図る必要性と, そのような情報をいかに迅速に漁業者から集めるか, それを可能にする体制をいかに構築するかなどが討議された。